

第2章 金沢の維持及び向上すべき歴史的風致

(1) 金沢の全体像

日本の古都と呼ばれる奈良、京都の都市基盤となった平城京や平安京などが中国の都城を模倣した都市であるのに対し、近世城下町は日本独自に発展した都市形態で、現代日本の多くの都市の原型となっている。それは、中国、ヨーロッパの高い城壁を巡らした閉鎖的な都市空間と異なる開放的な都市空間で、居住地は身分別（土地利用別）に配置され、それぞれ居住密度や建築様式が異なっていたが、都市として秩序正しく計画されていた。さらに、防火に配慮して用水網、緑地、防火帯を計画的に配置した思想は、都市計画の考え方として普遍的価値が認められる。

近世城下町を代表する最大都市は江戸であったが明治維新以降東京に改まり、西洋文明をモデルとした都市計画が進められた結果、その歴史的風致はほとんど失われ、現在は首都として機能する現代都市の代表となった。これに対し金沢は、最大大名である加賀藩の政治、経済、文化の中核機能を果たした城下町であり、安土桃山期から江戸期にかけて一時代を画した近世城下町の典型である。さらに、金沢は400年以上も戦禍に遭わなかった平和都市であり、同時に自然災害の大きな被害を受けなかったことから、現在も当時の都市構造（坂路、広見を取り込む城下町独特の街路網、惣構・用水網など）と歴史遺産（武士住宅、武家庭園、神社建築、町家及び近代建築並びに土堀が連なる武家屋敷群、寺院群、茶屋街などの歴史的な街並み）が良好に残る。さらに、それらの基盤を成す起伏に富んだ地形や台地の縁や市街地の背景を成す丘陵地域の豊かな自然が、都市空間に変化と潤いを与えている。また、それらの中で一体となって近世以来の伝統を伝える多様な文化や工芸技術が息づいている。

このように、金沢は近世城下町から引き継がれてきた重要な全ての構成要素を良好に残す、城下町構造に省略のない「フルセットの城下町」の代表であり、その歴史的風致は他に類を見ない世界に誇るべきものである。



[浅野川・卯辰山]



[金沢の全体像]

(2) 金沢の維持及び向上すべき歴史的風致

①金沢城・兼六園周辺に見る歴史的風致

藩政時代以来、金沢のシンボルとして都市核を形成する金沢城跡（国指定史跡）と兼六園（国指定特別名勝）及びその周辺は、金沢を象徴する歴史的風致の中心を成す歴史的建造物であるとともに、1年を通して様々な伝統文化や伝統行事が繰り広げられる舞台となっている。

新年初詣には、金沢城旧金谷出丸に建ち、擬洋風の神門（国指定重要文化財（建造物））を構える尾山神社は、県内有数の初詣客で賑わいを見せる。兼六園横にある旧藩校明倫堂の鎮守であった金沢神社（国登録有形文化財（建造物））では、隣接する金沢の名の起源といわれる金城霊沢の若水で入れた昆布茶が参拝客に振る舞われる。

また、越前万歳を起源として定着したといわれる、藩政時代から受け継がれた伝統芸の「加賀万歳」（市指定無形民俗文化財）が知事公舎などで演じられる。新春出初め式には、加賀大名火消しの伝統を現在に引き継ぐ「加賀鳶梯子登り」（県指定無形民俗文化財）が新丸広場を会場に盛大に演じられる。

4月初旬桜の季節には、旧百間堀の沈床園は兼六園と一体となって桜色に染まり、花見客で大いに賑わいを見せる。

6月に行われる市民最大のお祭り「金沢百万石まつり」は、藩祖前田利家を祀る尾山神社の封国祭が始まりで、祭りの華である武者行列は、一行が金沢城石川門（国指定重要文化財（建造物））から入城する場面が最大の見せ場となっている。また、祭りでは、復元された菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓を背景として「加賀宝生」（市指定無形文化財）の薪能や「加賀獅子」（市指定無形



[金沢城・兼六園位置図]



[加賀万歳]



[加賀鳶梯子登り]

民俗文化財) など様々な伝統文化、芸能が演じられ、市民や観光客を大いに魅了している。

また同時に、成巽閣(国指定重要文化財(建造物))、時雨亭、松風閣(国登録有形文化財(建造物))、旧中村邸(市指定保存対象物)など兼六園とその周辺の多くの茶室で、裏千家、表千家、宗和流など各流合同の百万石茶会が盛大に催されている。

金沢城跡では各時代、各手法で積まれた様々な石垣が見られ、建造物の復元、修理事業などを通じて、石工、大工をはじめとする伝統の職人技を継承する場ともなっている。さらに、兼六園の冬の風物詩として名高い雪吊りをはじめとする兼六園を維持・管理する庭師などの技は、日本の庭園文化の伝統を継承している。

②茶屋街に見る歴史的風致

金沢には藩政時代以来の3茶屋街が現在も残り、金沢城の北東、卯辰山山麓の浅野川右岸近くに「ひがし」、浅野川大橋下流左岸に「主計町」(いずれも国選定重要伝統的建造物群保存地区)、金沢城の南西、犀川左岸寺町台地のほぼ先端に「にし」が位置する。

「ひがし」の「志摩」(国指定重要文化財(建造物))に代表される茶屋建築は、1階表構えに紅殻の出格子を付け、潜り戸を備えた1枚扉の大戸が入り口に設けられており、背の高い2階表は座敷と縁を設えて開放的なつくりで、一般の町家建築とは趣が異なっている。

このような昔ながらの茶屋建築で、加賀百万石の伝統文化を



[加賀宝生薪能]



[兼六園(雪吊り)]



[茶屋街位置図]

示す芸能として継承されている「金沢素囃子」（市指定無形文化財）が、「ひがし」では一舞一管（舞と笛の2人）、「にし」では一調一管（笛と鼓の2人）で演じられているほか、踊りやお座敷太鼓、お座敷遊びなどの茶屋文化が現在も華やかに息づいている。また、検番と呼ばれる各茶屋街の組合事務所では、広間で芸妓衆の歌舞音曲の稽古が行われており、時節によって一般にも公開されている。

さらに、茶屋街では特に長唄が盛んであり、三味の音が街中から絶えることはない。



【茶屋建築の内部（志摩）】



【ひがし検番】



【お座敷遊び】



【にし茶屋街】

③寺院群に見る歴史的風致

金沢には藩政時代に形成された3寺院群が現在も残り、金沢城北東の卯辰山山麓、同じく南東の小立野台地、同じく南の寺町台地に各寺院群が位置している。寺院群では、藩政時代から広く庶民の間で信仰されてきた宗教行事や民俗行事が盛んで、現在も季節ごとにそれらを寺院や神社で見ることができる。

卯辰山山麓寺院群は、山麓の小さな寺院と山腹の寺院で構成されており、寺院数は40余を数え、山麓は曲がりくねった小路に沿って築地塀が連続し、山門は小さく塀も低い。「ひがし」の東に位置する観音院で行われる「四万六千日参り」は、その日に参詣すれば四万六千日参詣したのと同じ功德があるとされ、参詣する多くの人々で賑わいを見せる。その日（8月22日）が近づくと、「四万六千日」と墨書文字の独特の木版刷りのビラが市内で見られるようになる。当日は、観音院境内でとうきび市が開かれ、半紙で包み紅白の水引をかけた縁起物のとうきびが観音院門前の旧観音町や「ひがし」で町家の軒下などに吊され、独特の景観、風情を見せる。なお、観音院境内では明治まで

神事能が催されており、庶民の大きな娯楽のひとつとなっていた。「ひがし」に接する宇多須神社の節分豆まきは、恒例行事として多くの人々が集まり豆を取り合い、「ひがし」の芸妓衆による奉納踊りもある。寺院群の中程に位置する真成寺は鬼子母神の寺として知られ、月例祭には多くの参詣者があり、産育信仰資料（国指定有形民俗文化財）も残されている。また、毎年4月に行われる人形供養会には、1万體以上の人形が集まる。真成寺の東に位置する龍国寺には「加賀友禅」（県指定無形文化財）の祖といわれる宮崎友禅斎の墓があり、5月に友禅祭り（友禅斎法会）が行われており、手向けとして友禅おどりが「ひがし」の芸妓衆



〔寺院群位置図〕



〔町家に貼られた四万六千日のビラ〕

によって奉納されるほか、茶会も催されている。寺院群の北部に位置する月心寺には裏千家仙叟宗室、大樋焼初代大樋長左衛門の墓があり、茶室「直心庵」では毎月仙叟命日の23日に月釜がかけられている。

小立野寺院群は小立野台地に位置し、藩政時代に広大な境内地を有していた藩主前田家ゆかりの寺院が多くあり、台地の縁など周囲にも寺院が点在しており、寺院数は30余を数える。台地の東縁に位置する高源院では、毎年7月1日に「一つ灸」が行われており、健康を願う多くの人々が参詣する。3代藩主利常の正室珠姫の菩提寺として建立された天徳院（山門：県指定有形文化財（建造物））の側に、金沢城築城の時、石曳きの安全祈願を願い祀られた「下馬地藏尊」があり、地藏祭りに天徳院境内で地元住民による奉納踊りがある。さらに、台地を南東に伸びる石引通りを中心に9月に行われる「御山祭り」では、石曳きの歴史を再現して御輿のほか戸室石の巨石を曳山として通りを練り歩く。また、天徳院の北東に位置する上野八幡神社には「餅つき踊り」（市指定無形民俗文化財）が伝承されている。この行事は、藩政時代に12月行事のひとつとして有名であったとされ、9月15日の秋祭に隔年で行われており、横笛・三味線・鉦に合わせて餅つきのつき手と手返し役が軽妙に踊る。



〔上野八幡神社の社叢〕

寺町寺院群は寺町台地に位置し、寺町大通り沿いに山門と築地塀が連続する樹林を残す地区と、旧鶴来往還沿いに町家と混在しながら細い参道を通して境内に入る地区があり、寺院数は70余を数え3寺院群の中で最大規模を誇る。野田山へ向かう参詣道であった寺町大通りには、樹齢400年といわれる松月寺の大桜（国指定天然記念物）が道路に大きくはり出している。また、毎週土曜の夕方6時に地域住民が各寺々で一斉に梵鐘を打つ「土曜の晩鐘」が行われており、金沢の「音風景」のひとつとなっている。「にし」の北



〔松月寺の大桜〕

東に位置する神明宮の春秋例祭は、「御日待」とも「神明の夜祭り」ともいわれ多くの人々の参拝で賑わい、境内で「あぶり餅」が売られる。文政の頃から売り出されたというあぶり餅は御幣をかたどったもので、お祓いされた餅を食べれば無病息災に、天井に差しておく盗難を避けるとの言い伝えがあり、名物となっている。また、境内に樹齢一千年といわれる大ケヤキがあり、県内最大級を誇るその樹形は地域のランドマークとなっている。



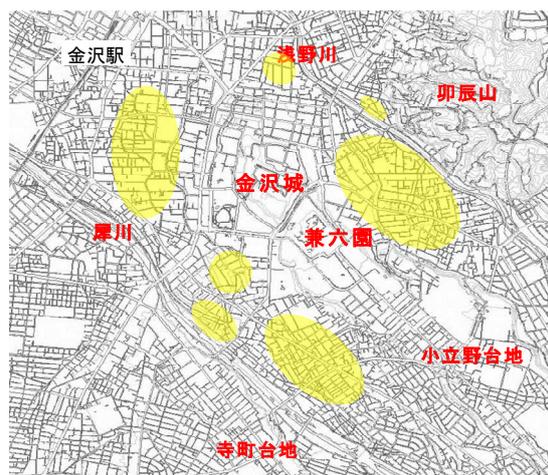
〔神明宮のあぶり餅〕

このように、金沢の3寺院群には様々な信仰・民俗に関わる伝統行事、宗教行事が市民生活の中に現在も息づいており、各寺院群それぞれの特徴的な景観とともに歴史的風致を形成している。

④旧武士居住地に見る歴史的風致

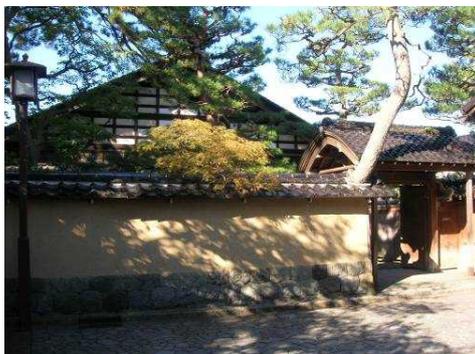
藩政時代に城下の約6割の面積を占めていた武士居住地は、金沢城を中心に面的に広がっていた。それらの多くは既成市街地の戸建て住宅地として現在に至っているが、土塀の連続や長屋門など現在もその歴史的名残を市内各所に見ることができる。また、主屋を中心として正面に門を構え、敷地周囲を土塀で囲う昔ながらの旧武士住宅も点在する。

長町武家屋敷群跡に位置する「大屋家住宅」（国登録有形文化財（建造物））では、所有者が季節ごとに建具を入れ替え、歳事に合わせた昔ながらの生活習慣が見られる。主屋には茶室が設えられ、茶の湯も愛好されている。セドと呼ばれる内向きの庭には大野庄用水の水が引き込まれ、四季折々に実を付ける果樹が多く植えられた様子は、実用を旨とした武士の気風を現在に伝え、藩政時代の武士住宅の風情を色濃く感じさせる。長町武家屋敷群跡では、降雪を前にした12月頃には庭木に雪吊りが行われ、周囲の土塀に「コモ掛け」も施され、季節の風物詩となっている。なお、「コ



〔武家屋敷群位置図〕

「モ掛け」は、長町以外に残る土塀でも行われている。



【大屋家住宅（長町）】



【土塀のコモ掛け作業（長町）】

このような旧武士居住地の風情が色濃く残る場所はこまちなみとして親しまれており、金沢城の北に「旧御歩町」、「旧彦三一番丁・母衣町」、同じく南に「里見町」、「水溜町」の街並みがある。

一方、敷地規模の大きな武士住宅地が近代以降に分筆され、その後に武士住宅の意匠を継承した近代和風建築などの街並みが形成されたところもある。金沢城の西に位置する長町や長土塀、同じく東に位置する横山町、材木町などの界限には、近代和風建築が多く残る。このような近代和風建築の表構えは、アズマダチと呼ばれる武士住宅の妻面意匠を継承したものや、入母屋造で重厚さを見せるものなどがあり、前面に洋室を設えたものもある。また、和室に茶室を設えている場合も多く、日常的に茶の湯が愛好されている。板塀などで囲われた敷地には、灯籠や名石を配した庭が造られているものもあり、庭師の伝統技を見ることができる。また、武士住宅の名残として、敷地正面、玄関脇などに見越しの松を残している家も多い。



【近代和風建築（長町）】

橋場町に残る旧森快安邸（市指定保存対象物）は、300石を受けていた藩医の居宅の遺構であるが、藩政時代からの大樋焼の伝統技を伝える大樋家が購入し、美術館を増築して一体的に利用している。この美術館では、金沢の伝統工芸のひとつである大樋焼を常時展示・公開している。



【旧森快安邸（大樋美術館）】

⑤旧町人居住地に見る歴史的風致

藩政時代に城下の約3割の面積を占めていた町人居住地は、武士居住地の間を縫うように北国街道や往還の沿道に線的に広がっていた。現在、旧北国街道は国道となり、片町から武蔵が辻の間は商業・業務地区として高層建築が立ち並んでいるが、旧城下上口の泉町や旧下口の春日町、大樋町には旧道が残り、尾張町界限には藩政時代から近代にかけての商業地の風情が残る。旧往還の沿道などには、間口が狭く両隣が建て詰まり、奥行の深い町家建築が現在も残り、旧町人居住地の往時を偲ばせる。

金沢城の北に位置する尾張町界限は、藩政時代に城の大手前として有力町人の商家が並んでいた場所で、「元金沢貯蓄銀行」（県指定有形文化財（建造物））、「旧三田商店」、「金沢文芸館」、「旧村松商店」（いずれも国登録有形文化財（建造物））「福久屋石黒傳六商店」、「壽屋」、「田上家」（いずれも市指定保存対象物）など、現在も数多くの歴史的建造物が残っている。また、武士の嗜みから広く庶民に広まった茶の湯の影響から、この界限には茶室を設えた町家や近代和風建築が多く、日頃から人々が茶の湯を嗜む機会が多い。さらに、商店街では各商家に代々伝わる品々を店先のショーウインドウに飾る「一品ミニ美術館」活動が行われているほか、九谷焼、加賀友禅、金箔工芸品、加賀玩具などの伝統工芸品の販売店舗も多い。前田利家が尾張から連れてきた商人が移り住んだといわれる尾張町では、町家や近代洋風建築など歴史的建造物を活用した商業活動が多く見られる。



〔旧町人居住地位置図〕



〔藩政時代から続く大店の店構（尾張町）〕



〔旧三田商店（尾張町）〕

旧北国街道が旧城下を北に出る下口の松門跡近くの大樋町、春日町では、緩やかに蛇行する沿道に藩政時代から続く造り酒屋「やちや酒造」（国登録有形文化財（建造物））や昔ながらの店先で雑穀を販売する「坂戸米穀店」（市指定保存対象物）など、歴史的建造物が生業とともに残っており、旧街道の雰囲気を感じさせる。



〔やちや酒造（大樋町）〕



〔坂戸米穀店（春日町）〕

小立野台地の東麓で、城下から北東山間地の二俣に向かい、越中福光に至る旧往還「二俣道」の沿道にあたる天神町には、台地に沿って蛇行する沿道に町家が数多く残る。小立野台地縁には坂路も多く、「天神坂」の横には椿原天満宮がある。その例祭時期には、門前として天神町は多くの参拝客で賑い、沿道には露店が並び伝統的な祭の風情を見せる。



〔椿原天満宮（天神町）〕

浅野川大橋右岸たもとから卯辰山に向かって藩政時代に築造された直線の街路に面する旧観音町は、藩政時代から観音院の門前として栄え、現在でも「四万六千日」の縁起もののとうきびが軒先に吊されるなど生活と民俗行事が密接に関わっている。また、東山地区の観光ボランティアの拠点にもなっている「旧涌波家住宅主屋」（市指定有形文化財（建造物））のほ



〔旧観音町の街並み〕

か三弦店、食料品店、酒店、味噌店、経田屋米穀店（国登録有形文化財（建造物））などの歴史的建造物が生業とともに現在も残っている。



〔旧涌波家住宅（旧観音町）〕



〔経田屋米穀店（旧観音町）〕

金沢城の北西に位置する安江町界隈は、東・西の本願寺別院の門前として栄えてきたが、現在でも仏壇店や法衣などを営む町家が残り、季節ごとの浄土真宗行事と関わりの深い生業が歴史的建造物とともに営まれている。金沢仏壇などに使用される金箔は、江戸・京都以外で箔打ちが禁止されていた江戸時代に密かに藩の庇護を受け続けられていたという歴史があり、現在では全国の生産量のほとんどを占めており、日本の美術工芸に欠かせない存在となっている。継承された箔打ちの職人技は、現在も市内の伝統的な町家などで生業として営まれており、その技術は金沢の気候や水質と伝統工芸の和紙を使う箔打紙などに支えられている。



〔法衣店（安江町）〕



〔金沢箔（箔移し）と金沢仏壇〕



〔仏壇店（安江町）〕

⑥河川に見る歴史的風致

浅野川と犀川は金沢を代表する河川であり、流れがやさしく繊細な情緒が漂うことから浅野川は女川とも呼ばれ、川幅が広く悠々と流れる犀川は男川とも呼ばれる。

「主計町」が面する浅野川では、浅野川大橋（国登録有形文化財（建造物）から上流部の河川敷を会場として毎年4月の桜咲く頃、昭和62年(1987)から東山界隈の住民が地域の環境、文化を伝えていくために始めた「浅野川園遊会」が催されている。特設の舞台では、謡曲、狂言のほか「ひがし」、「主計町」の芸妓衆による踊りやお座敷太鼓などが演じられ、多くの市民や観光客で賑わいを見せる。6月の「金沢百万石まつり」には、「友禅灯籠流し」が行われ、多くの人々はその幽玄な世界に浸る。



〔主要河川位置図〕



〔浅野川園遊会〕



〔友禅灯籠流し〕

浅野川に架かる7つの橋（常磐橋、天神橋、梅の橋、浅野川大橋、中の橋、小橋、昌永橋）を彼岸中日の深夜に渡る「七つ橋渡り」と呼ばれる民俗行事が伝わる。健康を祈り全ての橋を渡り終えるまで無言を守り、同じ道を通らないことがきまりで、近年は住民による地域行事としても行われている。

また、浅野川の清流を活かした「加賀友禅流し」（県指定無形文化財）が現在も行われ、付近に職人も多く居住しており、金沢の伝統文化、工芸技術が生業として色濃く残っている。



〔加賀友禅流し〕

犀川は、藩政時代につくられた金沢を代表する辰巳用水（国指定史跡）、鞍月用水、大野庄用水の水源となっており、その水が現在も旧城下域に潤いを与えている。犀川沿いで染物業を営む「平木屋染物店」（国登録有形文化財（建造物））は加賀藩御用達の染元で現在も染物業を営むが、藩政時代から大野庄用水取り入れ口の「水門番」も長く務めていた。かつての用水取り入れ口は、現在では水量調節の水門として残っている。また、犀川大橋の下流左岸の千日町には伝統工芸品の「和傘」を現在もつくる市内唯一の職人「松田家」があり、晴天に天日干しのため軒下に吊される多くの和傘が、花を咲かせたように鮮やかな風景を見せる。

また、藩政時代に心身の鍛練として武士のみに許されていた鮎釣りは、現在ではシーズンに多くの市民太公望を市街地の犀川に見ることができる。鮎毛針には藩政時代から続く金沢の伝統工芸品である「加賀毛針」を使う人たちも多い。

犀川大橋（国登録有形文化財（建造物））架橋400年を記念して始まった「金沢・犀川犀星まつり」が、犀川大橋上流部河川敷を会場として9月に開催されている。まつりでは「にし」の芸妓衆による踊りや篠笛、琴、三味線などが演じられるほか踊り流しも行われ、多くの人々で賑わいを見せる。

医王山系の山並みを背景とする犀川の河川空間は、その清流とともに市民に身近で開放的な憩いの空間となっている。



〔平木屋染物店〕



〔金沢和傘〕



〔加賀毛針〕

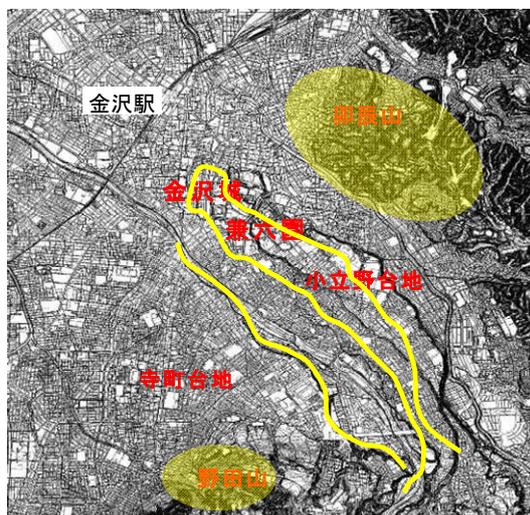


〔犀川大橋から上流部を望む犀川〕

⑦丘陵・台地に見る歴史的風致

金沢の特徴のひとつに卯辰山、小立野台地、寺町台地の3つの丘陵・台地で形成された起伏のある地形とそれらに連なる野田山など、丘陵地の豊かな自然がある。

金沢城のほぼ南に位置する野田山丘陵の一角に野田山墓地がある。加賀藩主前田家墓所（国指定史跡）が最高所に位置し、山裾に至る範囲に武士から町人まで、5万基以上ともいわれる墓が建ち並んでいる。加賀藩主前田家墓所には、歴代藩主とその正室・側室、子女などの80を超える墳墓が築かれており、個々の墳墓の大きさ、造営面積ともに全国最大級で、加賀百万



【主要な丘陵・台地位置図】

石の大名墓所の威容を誇っている。野田山墓地は、近代以降に市民墓地として広く開放され現在に至っている。これら藩主の墓をはじめとして、その維持・管理は、野田山麓の野田町、長坂町に住む人たちが藩政時代から「墓守」として行っており、その伝統は現在も引き継がれている。

金沢では浄土真宗が広く信仰されるなど、現在も宗教に関連する行事が盛んに行われており、特徴的な宗教民俗も多く残っている。中でも、

盆の墓参りに切籠灯籠（通称キリコ）を献上するのが金沢の特色である。キリコは、四角形の木枠の四面に紙を張り、その一面に名号や題目を書き、木枠の上は経木板の屋根を付けた簡素なもので、墓参の時に自家他家を問わず、墓前に吊される。1家あたり多いもので10～20個ものキリコが吊される。野田山墓



【野田山墓地（お盆の風景）】

地は7月13日～15日の金沢のお盆の時期、緑濃い松林の中に墓前につり下げられた多くの白いキリコが映え、独特の景観を見せる。

野田山墓地の西に曹洞宗寺院大乘寺（仏殿：国指定重要文化財（建造物）、山門・伽藍ほか：県指定有形文化財（建造物））が位置する。伽藍は参詣者に開放的で、座禅の道場としても知られ、一般市民向けに座禅

会が催されている。また、毎年1月5日の小寒から2月3日の節分まで、修行僧による寒行托鉢が旧市街地を中心に行われており、網代笠に黒合羽、草履のいでたちで寒の街中を進む一団は、冬の風物詩にもなっている。

金沢城の北東・鬼門に位置する卯辰山は、城の向かいにあることから向山とも呼ばれ、市民



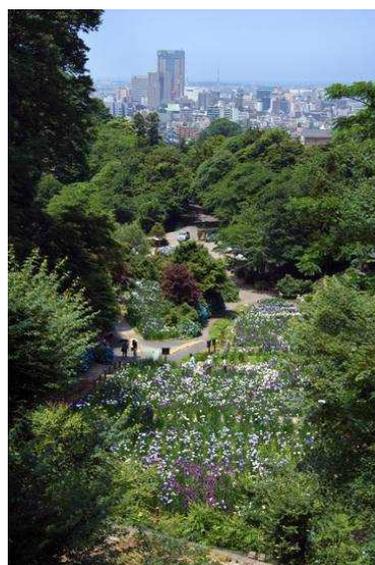
【大乘寺参道】

に身近な山として存在してきた。現在、山全体が公園として整備され、市民散策の場となっており、緑豊かな木立の中に立つ文学碑、顕彰碑などが60を超え、別名碑林公園とも呼ばれている。4月桜の時期は、金沢城、兼六園よりほんの少し遅れて山が桜色に染まり、少しだけ長く花見を楽しませてくれる。桜の後には、中腹にある花菖蒲園の菖蒲が市民の目を楽しませている。

卯辰山北側の中腹には、市政百周年を記念して建設された「金沢卯辰山工芸工房」がある。加賀藩御細工所の伝統技術を継承する陶芸、漆芸、染、金工など伝統工芸品の分野やガラスなどの分野で後継者の育成が行われ、市民工房では、市民が伝統工芸の制作に触れることのできる場を提供している。

金沢は、丘陵・台地による起伏ある地形で旧市街地が構成されており、台地の縁など各所に坂路が多く見られる。

小立野台地東縁に「八坂」、「馬坂」、「木曾坂」、「天神坂」、「鶴間坂」など、



【卯辰山花菖蒲園】

同西縁に「広坂」、「大乘寺坂」、「嫁坂」、「善光寺坂」などがあり、寺町台地東縁には「蛤坂」、「石伐坂」、「桜坂」、「長良坂」、「不老坂」など、藩政時代に由来する名前の付いた坂も多く、眺望点や生活道路として市民の身近な空間となっている。これらの坂路の途中には、不動尊や地藏尊が祀られていることも多く、地域住民の厚い信仰を集めている。なお、地藏尊は多くの寺院のほか市内各所で見ることができ、いずれも地域の人々によって守り伝えられており、地藏祭などが行われているものも少なくない。

小立野台地東縁の馬坂途中には岸壁を背にお堂に数体の不動尊が祀られ、細い滝が一筋落ちており馬坂不動寺の霊水と呼ばれ信仰を集めている。また、坂上に位置する高源院の門前には10体の地蔵尊が並んで立っている。



[馬坂途中の不動尊]

小立野台地西縁の善光寺坂上には祠堂に祀られた天正10年(1581)の銘があるといわれる本尊ほか12体の善光寺坂地蔵尊がある。地元住民による地蔵講があり、8月には読経、ご詠歌のある地蔵祭りが行われており、地域の人々の信仰を集めている。

また、善光寺坂に沿った民家に囲まれた場所に大清水(おおしょうず)と呼ばれるわき水があり、近隣の32軒が池の維持管理を行っている。わき水は現在も洗濯のすすぎや野菜洗いなどに利用されており、住民の交流の場ともなっている。



[善光寺坂地蔵尊祭り]

寺町台地東縁の長良坂途中に祀られた地蔵尊には昔ながらに「長生地蔵」と「開運地蔵」の提灯がいくつも吊り下げられており、住民の素朴な願いが込められている。



[大清水(おおしょうず)]

寺町台地東縁の石伐坂は坂が屈曲していることからW坂とも呼ばれる。桜坂上はかつて桜畠と呼ばれ藩政時代に金沢城からの眺望として桜が多く植えられていた場所である。名残の数本の桜が石伐坂の途中に見られ、犀川沿いの桜並木ともに花見の季節に人々の目を大いに楽しませている。



[石伐坂(W坂)]

⑧街路・用水に見る歴史的風致

城下町を構成した街路網は、様々なかたちに屈折した細街路が多く、城下全体が迷路的で複雑な様相を見せていたが、金沢ではその基本的形態が現在も残っている。

金沢では街路の部分的な広がりを「広見」と呼び、藩政時代に火除地として設けられたといわれているが、現在も旧城下域の各所で見る事ができる。寺町寺院群の中を犀川大橋から南に伸びる旧鶴来往還の途中に位置する「六斗の広見」は、市内最大規模を有する広見である。広見は、近代以降、地域行事や子供の遊び場としても存在してきたが、モータリゼーションの進展とともにその機能が失われた。こうした状況の中で、「六斗の広見」は地域住民がその空間機能の復権に取り組み、地域コミュニティの場として蘇った。周辺住民が共同で広見を会場とする「広見まつり」を開催し、まつりを通じて地域住民の交流が深まっている。このような動きは別の広見でも見られるようになり、「横山町広見まつり」や「瓢箪広見まつり」が開催され、加賀獅子舞、加賀鳶梯子登りが実演されるほか、茶会なども催されている。

本市では、小学校校区を単位とした地域活動、コミュニティ活動の場が確立されており、これらを中心に地域に根付いた伝統行事が活発に行われている。

旧城下域においてその基本単位をなす町会は、通りを挟んで向かい合う昔ながらの範囲で組織されており、町会名は住居表示以前の旧町名を基



[街路・用水網図]



[横山町広見まつり]



[瓢箪広見まつり]

本に呼称している場合が多く、藩政時代以来のコミュニティの伝統を色濃く残している。住居表示で失われた旧町名は地域住民にとってのアイデンティティとして現在も深い愛着をもたれており、その象徴として平成11年（1999）に全国で初めて「主計町」が復活した。その後さらに10の旧町名が復活しており、旧町名の復活は通りを挟んで向き合う伝統的なコミュニティを深める動きとなっている。

金沢には、犀川・浅野川を水源として旧城下域を中心に平野部を流れる用水が55水系あり、総延長は約150kmに及んでいる。城下の防衛・防火や灌漑などを目的につくられたこれらの用水は、現在も市民の生活と密接に関わりながら流れている。

犀川上流から引かれた辰巳用水（国指定史跡）の水は現在も兼六園の池泉を流れ、その一部は周囲の成巽閣庭園（国指定名勝）、成巽閣中庭、西田家庭園（いずれも県指定名勝）にも流れ、庭園の重要な景を見せている。

同じく犀川を水源とする鞍月用水の沿岸では、染物業の町家が見られ、用水の流れを利用して染物の糊を落とす作業を見ることができ、香林坊付近では開渠化された用水が商店街のシンボルとなっており、住民による清掃活動も行われている。

同じく犀川を水源とする大野庄用水は長町武家屋敷群地区内を流れ、その水を敷地内に取り込んだ西家庭園（市指定名勝）、野村家庭園などの庭園が沿岸に見られる。土堀を載せた石積み護岸に沿って流れる豊かな水が街並みに潤いを与え、鞍月用水と同様に住民による定期的な清掃活動が行われている。また、これらの用水は、冬季積雪時において消雪にも利用されている。

このように、市街地を流れる用水は街に潤いを与え、市民の生活と密接に関わり、深く市民に愛される存在となっている。



〔兼六園を流れる辰巳用水の水〕



〔西家庭園〕



〔鞍月用水〕



〔大野庄用水〕

これら市街地を流れる用水のほか平野部を流れる多くの用水は、藩政時代から灌漑用水としてその水が田畑を潤し、農事作業と密接に関わる身近な存在となっている。用水は、農業を営む上で不可欠な施設として存在してきたが、現在でもその水を利用するだけでなく、用水を生かすための「泥上げ」や「護岸補修」などの作業を通して人々と密接な関わりをもっている。

用水の恩恵を受けてきたものに稲作のほか畑作があるが、畑作物として戦前から作付けされてきた野菜を「加賀野菜」と呼んでいる。金沢の気候、風土に育まれてきた加賀野菜は、「さつまいも」、「加賀れんこん」、「加賀太きゅうり」、「金時草」、「ヘタ紫なす」、「源助だいこん」、「金沢一本太ねぎ」、「くわい」など15種を数える。これらは現在も四季折々に旬の味として広く親しまれており、もてなし料理のひとつ「はす蒸し」など、郷土料理の素材ともなっている。なお、これら郷土料理などを盛る器として金沢九谷が使用されることも多い。金沢九谷は再興九谷の伝統を受け継ぐ日本を代表する色絵磁器として発展してきたが、金沢の食文化に華やかな彩りを添えている。

愛着を寄せる人々の努力によって今日まで受け継がれてきたこれらの中でも、特に「加賀れんこん」、「くわい」は生育期間を通して水が必要なため用水の恩恵は大きく、いずれも5代藩主綱紀の頃から栽培されたといわれている。



〔はす蒸し〕



〔九谷焼〕

⑨茶の湯文化が育む歴史的風致

3代藩主利常に招かれた茶道宗和流金森宗和や裏千家仙叟宗室により広まった茶の湯は、工芸、作庭の分野だけでなく和菓子文化や自宅に茶室を設える建築文化など、近代以降の市民の生活に大きな影響を与えている。

「成巽閣」（国指定重要文化財（建造物））、「成巽閣煎茶席三華亭」、「夕顔亭」（いずれも県指定有形文化財（建造物））など指定文化財の茶室も多く、寺院や雪国の風土に根付いた伝統的和風建築などに設えられた茶室も旧城下域だけでなく広く市域に分布している。その数は120席を超え、それらに附属する茶庭も多く、これらの茶室で、日頃から多くの人々が茶の湯を嗜んでいる。また、季節ごとに金沢城跡、兼六園の周辺などを会場とする大茶会も催されている。加賀の楽焼として広く知られる伝統工芸大樋焼は、茶陶として茶の湯を嗜む人たちに愛されており、これらの大茶会では、大樋焼ほかの伝統工芸品の新作茶器が使用されることも多い。

さらに、茶の湯に関連して市内には和菓子屋や銘茶屋も多く、昔ながらの町家を店舗とする店もあり、日本三銘菓のひとつ「長生殿」など藩政時代初期からの伝統を受け継ぐ菓子や全国に知られた銘菓も多い。

このように、金沢には茶の湯文化が現在も広く市内全域で市民の生活の中に深く息づいており、歴史的建造物とともに歴史的風致を形成している。



〔夕顔亭〕



〔西田家庭園〕



〔広く市民の間で行われている茶会〕



〔大樋焼〕

⑩伝統芸能が育む歴史的風致

金沢には、藩政時代から受け継がれてきた多くの伝統芸能を現在も市内各所で見ることができる。

能楽は、藩主が奨励したことから「加賀宝生」として武士や町人の間に広まり、職人も謡を嗜んだ。金沢では屋根屋や植木屋が仕事の合間に謡を口ずさんだことから、「空から謡が降ってくる」とまでいわれるようになった。現在も加賀宝生は市民の間に息づき広く親しまれ、謡いを嗜む人も多く、祝いの席などで披露されることも珍しくない。また、県立能楽堂で定期的に演じられているほか、金沢城公園の橋爪門続櫓、五十間長屋や菱櫓など背景にして、篝火に浮かび上がる情緒ある薪能の舞台には多くの人々が詰めかける。また、11代将軍徳川家斉と12代家慶の能指南役で、金沢で門弟を育て能の振興に尽くした15世宝生大夫・宝生友干の墓が卯辰山山麓寺院群の全性寺（山門：市指定有形文化財（建造物））にあり、毎年7月に定例能の後、墓前で友干を偲ぶ紫雪忌が行われている。さらに、大野湊神社社叢（市指定天然記念物）の中に位置する能舞台では、藩政時代から続く神事能が行われており、上演日には境内地は多くの人々で埋められる。

加賀獅子舞は、旧城下域のほか周辺地域の各町会において広く伝承されており、地域に最も根付いた民俗芸能となっている。各地域の神社の祭礼で、獅子舞は地域の街並みの中を練り歩き、その後神社奉納されている。また、保存会



〔加賀宝生薪能（金沢城公園）〕



〔全性寺山門〕



〔加賀獅子舞〕

として百万石まつりに毎年参加しており、武者行列とともに加賀獅子が中心市街地を練り歩き、主要な場所で獅子舞が演じられ、まつりの華のひとつとして広く市民に親しまれている。

加賀藩が奨励した伝統芸能は、金沢歌舞伎や茶屋街の歴史とともに邦楽的な土壌に培われ、現在も金沢ならではの格調を維持している。日本舞踊・長唄・清元・哥澤・小唄・箏曲・尺八・琵琶などの芸能活動が現在も盛んで、市内各所の歴史的な街並みの中でその稽古の音曲などを耳にすることも多い。また、芸能には三味線・笛・太鼓・鼓・箏（琴）・尺八など種々の和楽器が使われるが、金沢には和楽器を扱う老舗も多く、昔ながらの町家で箏・三味線などの製作が行われている。



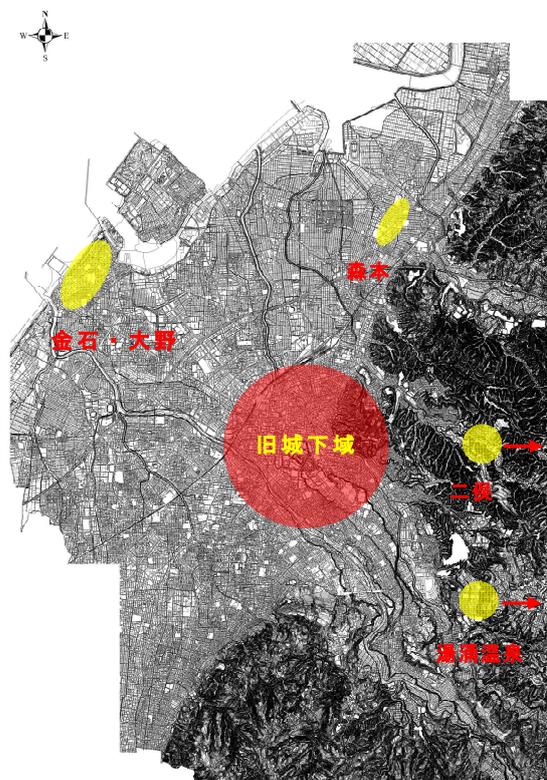
【町家で営まれている三味線店（旧観音町）】

このように、金沢には伝統芸能が現在も広く市内全域で市民の中に息づいており、歴史的建造物とともに歴史的風致を形成している。

⑪城下町と密接に関わってきた地域の歴史的風致

旧城下城の周辺には、藩政時代に物流や特別の産業によって城下町と深く関わりながら発展していた地域があり、現在でも歴史的風致を色濃く残す地区がある。

犀川と宮腰往還で城下町と結ばれ、城下を支えた金石（旧宮腰）は、城下町金沢の外港として加賀藩の流通経済の中心であった場所で、北前船の港として全国に知られていた。現在も、北前商人ゆかりの町家や寺院など歴史的建造物が数多く残り、それらには茶室が設えられており、折に触れて茶会が催されている。また、民俗行事も盛んであり、17町会に衣代を備えた曳山があり、その他の町会は全て規模の大きな太鼓台を持ち、8月の大野湊神社の夏祭りに町内を廻る。祭りの中日には、3組に分かれた悪魔払が、各家々をくまなく廻って演じられ、大きな賑わいを見せる。さらに、地藏尊を祀る祠堂も多く、住民の信仰を集め、地藏祭りも盛んである。



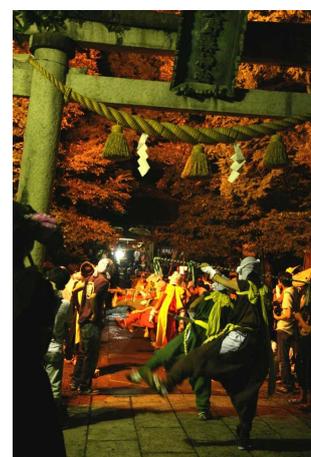
[旧城下城関連地域位置図]



[北前船商人ゆかりの町家（金石）]



[曳山]



[悪魔払]

金石と並ぶ藩政時代からの港町大野は、河北潟と浅野川の水運を利用して城下へ運ばれる物資の集積地であった場所で、加賀藩によって始められた醤油造りが現在も受け継がれ、醤油蔵と一体となった町家などが多く残る。また、7月の日吉神社の夏祭りに、山王悪魔払（市指定無形民俗文化財）が600戸余の家々をくまなく廻って演じられるほか、祭りの中日には神輿が町内を回り、大きな賑わいを見せる。



〔醤油醸造を営む町家（大野）〕



〔山王悪魔払〕

北国街道は、江戸時代に北陸における陸上交通の最も主要な幹線であったが、城下の下口

（北）から北に伸びた沿道に位置する森本は、越中へ向かう福光道の分岐点、河北潟周辺の中継地として栄えた場所で、参勤交代に利用された旧街道の面影をとどめる松並木（県指定天然記念物）や、緩やかに蛇行する沿道に歴史的な街並みが残る。付近の波自加弥神社は、全国唯一の生姜の神を祀る神社として知られ、毎年6月15日の「しょうが祭」には、全国からの生姜生産者や料理店関係者の参拝で賑わいを見せる。



〔旧北国街道沿道の旧家（北森本）〕



〔旧北国街道の松並木（北森本）〕

城下町と越中を結ぶ往還（二俣越え）の途中に位置する二俣は、加賀藩への献上紙漉き場として藩の庇護を受けていた。現在でも、伝統工芸の金箔生産にかかせない箔打紙を製造するなど、手漉和紙の伝統技術を担う地域となっている。九山八海の庭（県指定名勝）、本泉寺山門（市指定有形文化財（建造物））が位置するほか、地域の特徴を示す歴史的建造物も多い。蓮如ゆかりの地として浄土真宗の精神文化が色濃く残り、本泉寺境内では「二俣いやさか踊り」（県指定無形民俗文化財）が盆踊りとして盛大に催されるなど、現在も宗教民俗行事が盛んである。



〔金沢箔〕



〔本泉寺山門〕

藩政時代に越中五箇山で生産された火薬原料となる塩硝を城下へ運ぶルート「塩硝の道」の中継点であった湯涌は、歴代藩主が湯治場としていた古くからの温泉地である。現在、かつて加賀藩が幕府に献上していた雪を貯蔵する「氷室」に因んだ各種行事が温泉街で繰り広げられている。また、元金沢城下町に位置していた町家、武士住宅などの重要文化財、県、市の指定有形文化財建造物を一団として移築し、その保存が図られているが、事業に関わる多くの職人が伝統技術を学び、継承していく重要な機会にもなっている。



〔氷室開き〕

まとめ

金沢の維持及び向上すべき歴史的風致は、その風土と歴史に根ざした都市構造を基盤とする近世以来の各時代、各様式の歴史的建造物及びそれらと一体で形成される歴史的な街並みとともに現在も人々の生活、生業として営まれている様々な伝統行事、民俗行事、伝統文化及び工芸技術（伝統産業）が一体となって形成するものである。